

# 表象としての宗教

## ——1893年シカゴ万国宗教大会と中国

孫江

### 1 宗教の饗宴

コロンブスのアメリカ大陸発見400周年を記念して、1893年5月1日より10月28日まで米国シカゴで万国博覧会（World's Columbian Exposition）が開催された。博覧会の期間中に、シカゴでは様々な国際会議が開かれた。その中でとりわけ注目を集めたのが万国宗教大会（World's Parliament of Religions）であり、ヒンズー教、仏教、ジャイナ教、ゾロアスター教、道教、儒教、神道、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の10種の宗教代表が会議に出席した（一部は書面による出席）。会議終了後、準備委員会の代表者ジョン・バローズ（John Barrows）は、会議に提出された文章を2冊の本にまとめて出版した。<sup>1</sup>

シカゴ宗教大会の人類宗教史上における意義については、すでに多くの学者によって研究されている。アメリカの宗教史研究では主として、米国社会やキリスト教がいかに宗教問題をとらえたかに関心が向けられている。ドナルド・ビショップ（Donald H. Bishop）は、当時の米国キリスト教の他宗教に対する態度を排他主義、包容主義、多元主義の三つに分けた。<sup>2</sup> リチャード・シーガー（Richard Seager）は、この大会によって米国で宗教多元主義が誕生した点を強調する。<sup>3</sup> 東洋の宗教がアメリカでどのように受け入れられたかという観点からの研究もある。<sup>4</sup> 日本の宗教研究においては、大会前後の日本人出席者に対する仏教界の反応を詳細に調べた鈴木範久の研究があり、さらにシカゴ大会を概観したうえで平井金三の発言を詳しく紹介した森孝一の論考もある。<sup>5</sup> 近年、ジェームス・E. ケテラー（James Edward Ketelaar）がこの会議の近代日本仏教史における意義を高く評価し、

1 John H. Barrows, ed. *The World's Parliament of Religions: An Illustrated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, Held in Chicago in Connection with the Columbian Exposition of 1893*, Vol. I. Chicago: The Parliament Publishing Company, 1893, p. 19.

2 Donald H. Bishop. "Religious Confrontation, a Case Study: The 1893 Parliament of Religions." *Numen* 16: 1 (April 1969), pp. 63-76; "America and the 1893 World Parliament of Religions." *Encounter* 31: 4 (Autumn 1970), pp. 348-71.

3 Richard Hughes Seager. *The World's Parliament of Religions: The East/West Encounter*. Chicago, 1893, Bloomington: Indiana University Press, 1995.

4 Carl T. Jackson. *The Oriental Religions and American Thought: Nineteenth-Century Explorations*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1981; Rick Fields. *How the Swans Came to the Lake*. Boulder, Colorado: Shambhala Publications, 1981.

5 鈴木範久『明治宗教思潮の研究』東京大学出版会、1979年、207-31頁。

6 森孝一「シカゴ万国宗教会議：1893年」『同志社アメリカ研究』第26号、1990年3月。

改めてシカゴ宗教大会に対する日本学界の関心呼び起こした。<sup>7</sup> こうした研究と異なるものとして、会議に出席した駐米中国外交官・彭光誉の書いた「説教」(Confucianism)に注目し、彭光誉が儒教をとおしていかに宗教を理解したかを論じた陳熙遠および村田雄二郎による研究を挙げることができる。<sup>8</sup>

万国宗教大会の開催は、欧米におけるキリスト教の状況と無縁ではなかった。19世紀末、進化論が欧米を席卷し、神学は大きな打撃を受けていた。時を同じくして、キリスト教はフリードリヒ・マックス・ミュラー (Friedrich Max Müller) をはじめとする比較宗教学の衝撃も受けていた。比較宗教学は相対主義的な宗教観をもたらしたのである。「宗教は歴史上、最も偉大な事実である」。<sup>9</sup> これはバローズが大会文集に寄せた序文冒頭のことばだ。この一文には、宗教を再認識したい——実際には現世におけるキリスト教の意義を再認識したい——という意図がこめられていた。しかし、会議の席上、キリスト教とそれ以外の宗教とでは宗教に対する認識がまるで異なったばかりか、キリスト教内部においてもプロテスタントとカトリックの間には隔たりがあった。百年以上を経た今日、我々がこの大会を振り返ってみるとき、依然として当時と同じ問題——宗教とは何か——に直面せざるをえないのである。

本稿は、中国における近代の形成に対して、宗教はどのような関係にあったのかという問題をめぐって、私が長年取り組んできた研究の一部分である。私がシカゴ宗教大会に注目する理由は、中国の宗教がこの会議で自らの存在を見事にアピールしたからではなくて、初めての国際的な宗教大会において「中国の宗教」あるいは「中国の宗教と呼ばれるもの」がどのように表象されたかを探りたいからである。彭光誉の「説教」以外に、中国からは8編の文章が大会に寄せられている。作者自身が会場で読みあげたものもあれば、代読されたもの、配布されただけのものもあり、各々儒教、道教、キリスト教の立場を代表するものであった。キリスト教の宣教師には中国籍と外国籍の双方がいたが、彼らの示した「中国の宗教」にはいかなる共通点と相違点があったのだろうか。また中国仏教の不参加は意味深長であった。中国における仏教の衰退を暗示すると同時に、参加した日本仏教界の盛況ぶりとはきわめて好対照をなしたのである。

近年、翻訳語としての「宗教」(中国語の *zōngjiào*、日本語の *shūkyō*) という概念は、多くの学者の関心を集めている。コゼレック (Reinhart Koselleck) は概念史研究の特徴を述べる中で、「概念史」(conceptual history) と「思想史」(history of ideas) を比較して、思想を表す語彙が特定で不変なのに対して、概念は様々な語彙で表すことができるという。<sup>10</sup>

7 James Edward Ketelaar. *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and Its Persecution*. Princeton: Princeton University Press, 1990. (ジェームス・E. ケテラー／岡田正彦訳『邪教／殉教の明治——廃仏毀釈と近代仏教』ペリかん社、2006年)

8 陳熙遠「「宗教」——一個中国近代文化史上的關鍵詞」『新史学』第13巻第4期、2002年12月。村田雄二郎「東アジアの思想連環——清末中国「宗教」概念受容をめぐって」三谷博編『東アジアの公論形成』東京大学出版会、2004年。

9 John H. Barrows, ed. *The World's Parliament of Religions*. p. vii.

10 Reinhart Koselleck. *The Practice of Conceptual History: Timing History, Spacing Concepts*. Stanford:

私見では、“religion”が「宗教」と翻訳されたことを研究するのであれば、同時にどの中国語の語彙が“religion”と訳されたのか、それらの単語はいかなる相互関係にあるのかについても研究する必要があるように思う。本稿ではまず、日本の代表によって表象された「日本宗教」の問題に触れた後で、“religion”をめぐる中国と日本の翻訳の問題を簡単に振り返ってみたい。

## 2 彭光誉の宗教観

9月11日午前10時、シカゴ万国博覧会の「自由の鐘」が10回打ち鳴らされる中、数千人の観衆を前にして10種の宗教代表者たちが登壇し、17日間にわたる宗教大会が幕を開けた。

開会式では、中国から来た代表——清朝駐米二等参事官・彭光誉が簡単な祝辞を述べた。開会式の集合写真を見ると、彭は小太りで背は高くない。下級外交官である彭の生涯について知られることは少なく、現在確認できるのは1844年福建省崇安県に生まれ、捐官により候補知県となり、アメリカ赴任前に朝鮮で外交交渉にたずさわったということくらいである。<sup>11</sup>

会議の3日目、彭光誉の発言の番が回ってきた。彭の原稿はウィリアム・パイプ (William Pipe) という人物によって代読された。<sup>12</sup> 3万数千語におよぶ原稿は、中国駐米公使館の翻訳官・容揆——容閔の甥——により翻訳されたものである。<sup>13</sup> 英語版のほかにも中国語版が存在し、それがすなわち1896年に同文館で刊刻され、総理衙門より皇帝に献上された「説教」である。中国語版には皇帝の諭旨、および駐米・駐日・駐ペルー中国大使の楊から皇帝への報告が附されている。



写真1 万国宗教大会開会式会場

出典：John H. Barrows, ed. *The World's Parliament of Religions: An Illustrated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, Held in Chicago in Connection with the Columbian Exposition of 1893*. Chicago: The Parliament Publishing Company, 1893.

Stanford University Press, 2002.

- 11 中国第一歴史檔案館編『清代官員履歴檔案全編』華東師範大学出版社、1997年、597頁。彭光誉には「説教」のほかに『吉林通志』『鄂爾多城考』等の著作がある。
- 12 Pung Kwang Yu. “Confucianism.” In John Henry Barrows, ed. *The World's Parliament of Religions*. pp. 374-439.
- 13 彭光誉「説教」同文館、光緒22年（1896）。

なぜ外交官が宗教会議に出席することになったのか。実は、アメリカ側は中国にシカゴ万国博覧会への参加を要請したが、李鴻章に「中国はシカゴで展示するものなどない」と拒否されていた。<sup>14</sup>その後、バローズの再三の要請にこたえて、総理衙門はワシントンから彭光誉を出席させることにしたのである。彭光誉の上司にあたる楊大使は次のように奏折に記している。「彭、8月9日（陰暦6月28日）シカゴ着。10月1日（8月20日）終了。各国代表との「応酬、きわめて円満」<sup>15</sup>。彭の自叙にも次のようにいう。「丙戌（1886年）米国に派遣される。癸巳（1893年）会議を終えて帰る」<sup>16</sup>。彭光誉の外交官生活の中で、この大会は誇りとすべき大事件であり、「最初儒人海西経」（西洋に経典を伝えた最初の儒者）と詩に詠んでいる。彼はこの詩句に注を加えて、「諸外国では創始者が最も重んじられ、その名は各国の史書に記されている。西域、インド、アラブの経典を中国に持ってきた人はいるけれども、中国の経典を外国に伝えた人はいない。儒家が外国でその経典や教を伝えたことはいまだかつてなかったのである」<sup>17</sup>という。では、彭光誉は西洋人に何を宣伝したのだろうか。まずは彼の発言の目次を、中国語版と英語版の両方で見てみよう（表1）。

表1 万国宗教大会における彭光誉の発言目次

目次	中国語版	英語版
1	説教	Confucianism
2	説教	To Rev. John Henry Barrows, D.D., Chairman of the Committee on Religious Congresses
3	帝教篇第一	Instruction by Rulers
4	師教篇第二	Instruction by a Teacher
5	天道篇第三	The Laws of Nature
6	神道篇第四	The Doctrines of Orthodox Scholars
7	人道篇第五	Heterodox Doctrines
8	儒學篇第六	The Laws of Humanity
9	異學篇第七	The Laws of the Spiritual World
10	外篇上	Supplement First
11	外篇下	Supplement Second

表の中国語と英語を対照してみると、第1篇にやや違いが見られ、第6篇～第8篇は順序が異なるものの、それ以外は完全に内容が一致している。彭光誉の上司である楊大使は、彭が「中国の儒仏道三教の源流、およびキリスト教との異同を詳しく論じ、その中に欧米宣教師に対する風刺の意味をこめた」<sup>18</sup>ことを明かしている。彭の文章は三つの部分に分

14 W.A.P. Martin. "America's Duty to China." In John Henry Barrows, ed. *The World's Parliament of Religions*. p. 1138.

15 「出使美日秘国大臣楊奏」、彭光誉「説教」参照。

16 彭光誉「説教」、56a頁。

17 同前。

18 前掲「出使美日秘国大臣楊奏」。

けられる。第一は、儒教の立場から「宗教」とは何か、中国に宗教はあるか、を論じる。第二は、儒教思想の内容を紹介する。第三は、キリスト教が中国で布教する際に引き起こした「教案」について論じる。本稿と密接に関わるのは第一の部分であり、それが彭光誉の発言の核心でもある。

彭の英文は欧米人に向けて書かれたものであり、英語版と中国語版を対照させることによって、作者がどのようなコンテキストのもとで religion という語を用いているかを理解するのに役立つ。彭は中国語版の冒頭で大会組織者とは正反対の見方を表明して、「万国宗教会」(The World's Parliament of Religions) を「万国景教会」と呼んでいる。「景教」(Nestorius) は中国のコンテキストにおいて特定の意味を有し、唐代に中国へ伝わったキリスト教の一派を指す。彭は「景教」という語に、次のような注を付す。



写真2 彭光誉

出典：John H. Barrows, ed. *The World's Parliament of Religions*.

西学に記載される「大秦景教の中国に流行せる碑」の景教とは、西方の古教であり、今の宗教とは違う。英語で「爾釐利景<sup>レリジヨン</sup>」というのを、「景」字を用いて訳すのは、同じ発音の字を用いてわかりやすくするためである。最後の一字だけを用いるのは、同文館の丁冠西総教習が、もとの姓は馬爾丁<sup>マーティン</sup>であるのに、中国では最後の一字だけを取って「丁」というのと同じである。<sup>19</sup>

「同文館の丁冠西総教習」とは丁韞良のことを指す。丁韞良がこの大会に提出した文章については後で論じる。上の一段は英語版にはない。注目すべき点が二つある。第一に、彭は「景教」の「景」の発音を借りて、religion を「爾釐利景」と訳している。第二に、religion を「爾釐利景」と訳すのは単に翻訳の問題であるだけでなく、religion をいかに解釈するかという問題に関わるのである。彼は次のように言う。

この会議で議論されているところのものは、英語で「爾釐利景<sup>レリジヨン</sup>」(religion) という。明末のヨーロッパ人がこれを中国語に訳して「教」とした。しかし、中国語の「教」字の意味は、虚字では英語の「題赤<sup>ティーチ</sup>」(teach)、実字では英語の「音司黜盧克慎<sup>インストラクション</sup>」(instruction) に当たる。<sup>20</sup>

19 彭光誉「説教」、1a-1b 頁。

20 彭光誉「説教」、3a 頁。英語版：Now take the word "religion," which is the subject under discussion. Toward the close of the Ming Dynasty, the Europeans in China used the word "kao" in the sense of Religion. But "kao" signifies properly "to teach," if used as a verb, or "instruction" if used as a noun. (Barrows. op. cit. p. 375.)

明末のヨーロッパ人が religion を「教」と訳したのが、実は一種の誤訳であることを彭は指摘している。なぜなら中国語の「教」の本義は、英語の動詞 teach あるいは名詞 instruction に当たるものであって、ヨーロッパ人のいう religion ではないからだ。このような誤解が生じた原因は、仏教・道教・回教と関係があることを指摘する。

儒教という名称についていえば、仏・老の信徒が仏教・道教と自称したことから、綱常の礼教に儒の名を付して、三教と称したのである。儒者はその二つを異学とみなし、回教徒も儒教を大教とみなしていた。仏・道の二者が自ら区別するために名付けたのであって、中国にもともとこうした異名があったのではない。中国に礼教は一つしかないのである<sup>21</sup>。

儒教は religion ではない。では、中国に religion はないのか。それに対する、彭の答は否定的なものである。彼は続けて言う。

私が英語の辞書を調べてみると、「爾釐利景」<sup>レリジヨン</sup>とは人をして神に従順たらしめ、神を礼拝せしめ、神を愛さしめて、真心をもって神の真理に仕えることだという。よく神を知り、神の言葉に仕え、書を著し説を立て、未来のことを予言できる人を、「樸羅肺特」<sup>プロフィット</sup> (prophet、「先知師」または「祭司」と訳す) という。神に祈り、人に代わって祈りをささげることのできる人を、「樸釐司特」<sup>プリースト</sup> (priest、「神甫」と訳す) といい、「帕司特爾」<sup>パスター</sup> (pastor、「牧司」と訳す) といい、「彌泥司特爾」<sup>ミニスター</sup> (minister、「教士」と訳す) といい、「彌森訥爾來」<sup>ミッシヨナリー</sup> (missionary、「教士」と訳す) という。ところが、「爾釐利景」は中国語で「巫」と称すべきもので、「樸羅肺特」<sup>プロフィット</sup>「樸釐司特」<sup>プリースト</sup>「帕司特爾」<sup>パスター</sup>「彌泥司特爾」<sup>ミニスター</sup>「彌森訥爾來」<sup>ミッシヨナリー</sup>などは中国語で「祝」と呼ぶべきものである。未来のことを予知するのは、中国語では「讖緯之学」<sup>22</sup>と呼ぶものである。

21 彭光誉「説教」、3a-3b 頁。英語版：Even the term “Yu kao,” or Confucian school, is employed only by the Taoists and Buddhists to distinguish the established system of instruction founded upon the principles of social relation, from their own systems of belief, which they call “Tao-kao” and “Foh-kao” respectively, by prefixing the word “yu” to the general term “kao.” To these three systems of doctrine they sometimes give the name of “San-kao,” or three systems of instruction. But Confucianists refer to the two sects only as “heterodox system of doctrine.” Mohammedans call the Confucian system of doctrine “ta-kao,” or the great system of instruction. All these terms, however, can be traced to those who desire to separate themselves by a distinctive name from the general body of the people. They are not of Chinese origin. The only term that is of a Chinese origin is “li-kao,” or the proper system of instruction. (Barrows. op. cit. p. 375.)

22 彭光誉「説教」、3b-4a 頁。英語版：I find “religion,” as defined by Webster, to be “the recognition” of God as an object of worship, love and obedience, or right feelings towards God as rightly apprehended,” “prophet” to be “a person illuminated, inspired or instructed by God to speak in his name or announce future events,” and “priest” to be “one who officiates at the altar, or performs the rites of sacrifice, hence, one who acts as a mediator between men and the divinity of gods,” pastors, ministers, missionary being only different names for persons who perform functions quite similar to

彭光誉にとって、religion は「巫」、神職は「祝」であり、漢代に流行した讖緯の類であった。それだけでなく、キリスト教の崇拝する対象、創世記の神話、宗教思想はすべて道教や仏教と似通っていた。彼はさらに続けていう。「英語の「高德」(God)を調べると、明末のヨーロッパ人は「上帝」「神」「真神」「独一之神」といった中国語に訳している。「帕特爾」(pater)があり、「耶和華」(Jehovah)がある。偶像があり、創世記がある。仏老巫祝に近い<sup>23</sup>。最後に彭は次のように指摘する。「最近の西国の学者の中には、孔子は「爾釐利景」ではないという人や、中国には「爾釐利景」がないという人がいる。孔子が「爾釐利景」ではないというのは正しいが、中国に「爾釐利景」がないというのは正しくない<sup>24</sup>。ここからわかるのは、彭の考えでは儒教はあらゆる religion よりも上にあるもので、一方 religion はシャーマンの巫術に属し、せいぜい仏教や道教と同類だと考えられていたのである。

以上の結論を得たうえで、彭光誉は「説教」の第二部へと論を進める。第二部では7篇に分けて儒教思想を論述する。「帝教篇第一」では、「帝とは天であり、人君である」という。人君とはすなわち聖人のことである。「聖人は神の道を以て教えを設け、天下はそれに服す」という。帝教というものは「政教」にほかならず、政治と教化の体系である。「師教篇第二」では、孔子の三綱五常について論述され、師教がすなわち帝教だとされる。「天道篇第三」では、天地生成に関する孔子の道理が述べられる。「神道篇第四」では、神は陰陽の間に介在するが、感知しえない存在であり、儒者はそこに深く立ち入らないという。「人道篇第五」は綱常人倫の関係を重視することを強調する。「儒学篇第六」では、いかに孔子の教えに従い学んで、儒者になるかが述べられる。「異学篇第七」では、儒家以外の諸子の学説、および仏教など外来の宗教が紹介され、マテオ・リッチが中国に来てキリスト教を伝えたことに及ぶ。

ところが、彭光誉は続く「外篇上」において、牽強付会にもキリスト教は礼教(儒教)と似ていると述べ、ひるがえって「儒者が孔子を尊信する理由は、道徳にあって、神威に

---

those of a priest. Now according to these definitions, "religion" has its proper Chinese equivalent in the word "Chuh." As for those persons who can foretell the future events, they can find their associates in China in those who are versed in sooth-saying. (Barrows. op. cit. pp. 375-76.)

23 彭光誉「説教」、4a-4b 頁。英語版：When Europeans first made their way into China, toward the close of the Ming Dynasty, they found it difficult to hit upon a proper Chinese word for God. They made use of the terms "Shangti" (Ruler of the upper Religions), "Shen" (Spirit), "Chan Shen" (True Spirit), "Tuh-i-chi-Shen" (Only Spirit). Sometimes they merely translated the word "pater" and "Jehovah" by means of Chinese character. In their worship they made use of images. They had certain tradition on the subject of cosmogony. Their religious beliefs seemed to bear a strong resemblance to those held by Buddhist and Taoist priests. (Barrows. op. cit. p. 376.)

24 彭光誉「説教」、5b 頁。英語版：There are some western scholars who say that the system of doctrines of Confucius cannot be properly called a Religion, and there are others who say that China has not Religion of her own. That the ethical systems of Confucius be called a Religion may be admitted without fear of contradiction, but that China has not Religion of her own must be taken as not well founded in fact. (Barrows. op. cit. pp. 378-79.)

はない<sup>25</sup>」とし、キリスト教は中国ないしアジアの様々な思想流派の中で、「諸子の一子」「諸家の一家」にすぎないと強調する<sup>26</sup>。この30年あまり、キリスト教は中国で大きな問題となっていた。つまり宣教師が「専ら下愚細民と縁を為し、中国の政俗を察せず」という状況であった<sup>27</sup>。彼は、もし「世俗を察し」「人品を択ぶ」ことができれば、「10年後に或いは民教は相安んず」ことだろうと予言している<sup>28</sup>。

中国のことをあまり知らない、あるいは何も知らない聴衆にとって、彭光誉の文章はおそらく意味不明であったろう。中国から来て出席していた宣教師を唯一奮い立たせたのは、「説教」が欧米の自然科学・社会科学への重視を表明したことだけだった。「キリストの愛を中国の下層民に施そうと思うなら、中国へ赴任する宣教師には神学以外の学問にも通じた人を選んでほしい」。にもかかわらず、宗教とは何かをテーマとする本稿にとって、彭光誉が述べた内容はきわめて重要である。なぜなら彭は中国語の「教」は religion でなく、儒教は宗教でないことを指摘しているからだ。religion を翻訳する際に、彼は音訳と意識を結合させた新しい名詞「レリジヨン爾釐利景」を創出した。彼の意識の深層において、世界 religion 大会とは「キリスト教」大会でしかなく、彼はそのキリスト教大会に対して儒教の立場を述べる「他者」であったのだ。

### 3 翻訳された儒教と道教

ジョン・バローズが編纂した大会文集には、“prize essay”と記された二編の受賞論文が収められている。一つは Kung Hisen Ho の“Confucianism”であり<sup>29</sup>、もう一つは無署名の短文“Taoism”である<sup>30</sup>。この二編の来歴をたどると、前者は上海の孔憲和が著した「儒論」<sup>31</sup>で、後者は鎮江の李葆元の書いた「道教論」であることがわかる<sup>32</sup>。この二つの文章は、宣教師が上海で創刊した『万国公報』に相前後して掲載された。『万国公報』所載の「儒論」の末尾には、英国バプティスト教会の宣教師で英語通訳の李提摩太 (Timothy Richard, 1845-1919) の訳注が加えられている。

米国シカゴで開催された博覧会は、規模が大きく、物産も多く、未曾有の盛況であった。この博覧会は、もともとアメリカを発見したスペインのコロンブスの功績を称えるためであって、400年前の偉業、その名声これに勝るものはない。各国が物産を競

25 彭光誉「説教」外篇上、43頁。

26 同上、45頁。

27 同上、48頁。

28 同上、54頁。

29 Kung Hisen Ho. “Confucianism.” In John Henry Barrows, ed. *The World's Parliament of Religions*. pp. 596-604.

30 “Taoism,” a prize essay. In John Henry Barrows, ed. *The World's Parliament of Religions*. pp. 1355-58.

31 孔憲和「儒論」、『万国公報』第54冊、光緒19年6月（1893年7月）。

32 李葆元「道教論」、『万国公報』第55冊、光緒19年7月（1893年8月）。

うだけでなく、五大洲から各国の宗教が参集した。これより前に、大会の主催者が私に書簡を送って、中国の名士に儒教と道教について論じさせ、優れたものを選んで欧文に翻訳し、大会に送って討論の材料にしたい、と依頼してきた。力作が多数寄せられ、私と二人の友人とで審査して甲乙を定め、『申報』に掲載した。<sup>33</sup>

李提摩太は二編の文章の来歴をはっきりと説明している。当時、『万国公報』の編集主幹・林樂知 (Dr. Allen) は休暇で米国に帰国しており、もう一人の編集者で漢学者の艾約瑟 (Dr. Edkins) もヨーロッパ滞在中であった。<sup>34</sup>そこで李提摩太が臨時で編集作業に当たった。この二編の文章が受賞したのは、もちろん儒教と道教の内容の核心を簡潔に示したからであるが、これらには宣教師・李提摩太の儒教と道教に対する認識をも反映されている。そして李提摩太による翻訳は、翻訳をめぐる再創作というもう一つの問題をもたらしているのである。

「儒論」は会議の5日目に登場した。作者の孔憲和は出席しなかった。この文章の趣旨は彭光誉と同じく、なぜ儒教が倫理を重視するかを述べたものである。しかし、そのニュアンスと論述のしかたには大きな違いがあった。孔憲和は冒頭、次のように言う。「君子の学は、何よりもまず天命を畏れる。故に吾が儒の学は、天命に従うのである」。<sup>35</sup>続いて、儒家の経典が中国の歴史と深く関係していることから儒教の生命力を論証し、「儒が古今に伝わり、他の教えに勝る理由は、怪異を求めず、偏りがなく、その公明正大な道は、自らの身体の修養によって実践できるものである。いわゆる日月が出れば、燭の光はおのずから消えるとはこのことである」と言う。<sup>36</sup>中国語と英語のテキストを比較すると、李提摩太が原文を逐語訳していることがわかるのだが、それにもかかわらず彼が英語の単語を使って中国語の概念を翻訳するときに、やはりいくらかの差異が生じている。ここでは二つの節を選んで比較してみよう (表2)。

33 孔憲和「儒論」。

34 Timothy Richard. *Forty-Five Years in China*. London: T. Fisher Unwin, 1916, p. 222; William E. Soothill. *Timothy Richard of China*. London: Seeley, 1924, pp. 175-76.

35 孔憲和「儒論」。The most important thing in the superior man's learning is to fear disobeying heaven's will. Therefore, in our Confucian religion the most important thing is to follow the will of heaven. (Barrows. op. cit. p. 596.)

36 孔憲和「儒論」。That is what has caused Confucianism to be transmitted from the oldest times till now, and what constitutes its superiority to other religions is that it does not encourage mysteries and strange things or marvels. It is impartial and upright. It is a doctrine of great impartiality and strict uprightness, which one may body forth in one's person and carry out with vigor in one's life. Therefore we say, when the sun and moon come forth (as in Confucianism), then the light of candles can be dispensed with. (Barrows. op. cit. p. 604.)

表2 「儒論」原文と英語翻訳

<p>程子曰：鬼神者天地之功用，而造化之跡也。朱子曰：以二氣言，則鬼者陰之靈也，神者陽之靈也，以一氣言，則至而伸者為神，反而歸者為鬼。</p>	<p>Cheng Tsze says: "The <u>spirits</u> are the forces or servants of heaven and earth and signs of creative power." Chu Fu Tsze says: "Speaking of two powers, the <u>demons</u> are the intelligent ones of Yin, the <u>gods</u> are the intelligent ones of Yang; speaking of one power, the supreme and originating is called <u>God</u>, the reverse and the returning is <u>demon</u>."</p>
<p>中庸引孔子曰：鬼神之為德，弗其盛矣乎？視之而弗見，聽之而弗聞，體物而不可遺，使天下之人，齊明誠服，以承祭祀，洋洋乎如在其上，如在其左右，鬼神之情狀如此。所以易重卜筮，取決於鬼神，知鬼神實天地之氣，雖無形而有氣，若難憑而易知。特世間之大聖大賢忠臣義士孝子節婦，秉天地浩然之正氣，生而為英，沒而為神，其氣歷久不散，能有功於世。</p>	<p>The Chung Yung, quoting Confucius, says: "The power of the <u>spirits</u> is very great! You look and cannot see them, you listen and cannot hear them, but they are embodied in all things without missing any, causing all men to reverence them and be purified, and be well adorned in order to sacrifice unto them. All things are alive, as if the gods were right above our heads or on our right hand or on the left. Yih King makes much of divining to get decisions from the <u>gods</u>, knowing that the <u>gods</u> are the forces of heaven and earth in operation. Although unseen, still they influence; if difficult to prove, yet easily known. The great sages and great worthies, the loyal ministers, the righteous scholars, filial sons, the pure women of the world having received the purest influences of the divinest forces of heaven and earth, when on earth were heroes, when dead are the gods. Their influences continue for many generations to affect the world for good, therefore many venerate and sacrifice unto them."</p>

上の中国語と英語を比較してわかるのは、李提摩太が「神」(*shén*)、「鬼神」(*guishén*)、「鬼」(*guǐ*)を翻訳するのに異なる語を選択していることだ。「神」を訳すときには God、gods、spirits が使われ、「鬼神」は gods、spirits と訳され、「鬼」は demons と訳されている。こうした柔軟な翻訳は、訳者が異なるコンテキストにおいて儒家の術語をきちんと理解していることを表している。このことは同じく religion の理解にも表れている。次の中英版における religion 翻訳の対照表を見てみよう (表3)。

表3から、李提摩太が用いた religion には三つの特徴があることが見てとれる。第一に、ある種の思想体系を指すのに使う。第二に、礼あるいは礼楽、すなわち制度を指すのに使っている。第三には、「修道」すなわち信仰を實踐するやり方を指している。

『万国公報』は「儒論」を掲載後、すぐに「道論」も掲載した。この文章の英訳は、大会文集の "scientific section" に収録された。中国語版と比べて、英語版の内容はかなり簡

表3 「儒論」における原語と翻訳語 religion

故吾儒之學，首在承天命。	In our Confucian religion the most important thing is to follow the will of heaven.
中庸所謂修道之謂教也。	The Chung Yung calls the practice of wisdom religion.
吾儒既深知天命，故其視天下猶一家。	Our religion well knows heaven's will, it looks on all under heaven as one family.
辭讓之心，禮之端也。	A yielding disposition is the beginning of religion.
若仁又包夫義禮智。	As to benevolence, it also includes righteousness, religion and wisdom,
(孔子) 刪詩書，定禮樂，贊周易，修春秋，而言治國。	(Confucius) edited the odes and the history, reformed religion, made notes on the "Book of Changes", wrote the annals of spring and autumn, and spoke of governing the nation.
自後，雖時代變更，斯道昭於天壤。	After this, although the ages changed, this religion flourished.
朱子集其成，斯道粲然大明。	Chu Fu-Tsze collected their works and this religion shone with great brightness.
曠覽歷代，其關係于治國而他教不能勝之處，亦有明驗。	On looking at it down the ages there is also clear evidence of results in governing the country and its superiority to other religions.
漢興，雖尚黃老，然百姓苦秦暴久，故易於為理，叔孫通之制禮，故不足重，而經籍之發明，多由漢之諸儒。	Then the Han dynasty arose (B.C. 206-A.D. 220). Although it leaned toward Taoism, the people, after having suffered so long from the cruelties of the Tsin, were easily governed. Although the religious rites of the Shu Sun-tung do not command our confidence, the elucidation of the ancient classics and books we owe mostly to the Confucianists of the Han period.
明太祖立，定禮制樂，號稱太平。	When the first emperor of the Ming dynasty (A.D. 1368-1644) arose and reformed the religion and ritual of the empire, he called it the great, peaceful dynasty.

単で、原文の抄訳となっている。作者は「道論」の冒頭で道教の衰退を嘆いて、「ああ、どうして我々の教えは今日ここまで衰退してしまったのか」と言う。この部分は英語版ではまったく翻訳されず、「道教と儒教は中国で最も古い宗教であり、道教はあらゆる宗教の元祖 (originator) である」<sup>37</sup>となっている。道教はいつから衰退しはじめたのか。原文

37 李葆元「道教論」、『万国公報』第55冊、光緒19年7月（1893年8月?）。

表4 「道論」における原語と翻訳語 religion

惟吾教與儒教為最先。	Taoism and Confucianism are the oldest religions of China.
吾教起初實創於元始。一再傳之老聃，老聃生於東周時，為柱下史。	Taoism originated with the originator of all religions. He transmitted it to Lao-tsze, who was born in the Chow dynasty (about B.C. 604), was contemporary with Confucius, and kept the records.
考漢志所錄，道家三十七部， <u>神仙家</u> 十部，本不相同。	In the Han dynasty Taoism had thirty-seven books and the genii religion ten. These are different at first.
吾教中有好異者，以為清靜無為之說，不足動人之聽聞，乃以 <u>修煉內丹外丹諸術</u> ，以炫耀其奇靈。	But from the time Taoism ceased to think purity and peaceableness sufficient to satisfy men, it became the genii religion (magic and spiritualism), though still called Taoism.
何謂承天命？蓋道之大原出於天，人身一小天地也，稟陰陽二氣以生。	What does Taoism mean by the phrase, carry out heaven's will? It means that heaven is the first cause of religion, that man is produced by two forces, Yin and Yang.
真心學道之人，養其性，存其神，斂其氣，收其心。	Those who really study religion, cultivate their spiritual nature, preserve their souls, gather up their spiritual force, and watch their hearts.
又吾教中微妙之造詣，有非他教中所能及者。	Comprehension of the hereafter is one of the mysteries in which no religion can equal Taoism.
綜論吾教之興衰，知道家與 <u>神仙家</u> 已合為一。	Taoism and the genii religion have deteriorated.
誠有一人焉，以振興吾教為己任。	Oh! that one would arise to restore our religion.

では「張魯が教えを立てると護符を使った祈祷で人々を導き、北魏の寇謙之らは祭壇を設け呪文を唱えて祈祷と祓いを行うようになり、荒唐無稽なことが時代とともにますます横行し、道教の宗旨はでたらめなものとなってしまった」となっており、その内容は英語訳とややずれがある。李提摩太がどのように religion を翻訳しているか見てみよう（表4）。

ここでは「吾教」と「道」が religion と訳され、religion は道教を指している。religion のほかに、genii religion という訳語も使われ、religion より下位の「煉丹」「神仙家」を指す。作者によれば漢代以降、道教は墮落しはじめ、訳語も religion から genii religion へと変わった。

李提摩太の翻訳からわかるのは、religion という語が儒教と道教という異なる二つの意味内容を引き受けたということである。ところが、儒教と道教は神霊信仰と無神論との中

38 李葆元「道教論」。Chang Lu (A.D. 385-582) used charms in his teaching, and employed fasting, prayer, hymns and incantations to obtain blessings and repel calamities; and Taoism's fundamental doctrines had utterly disappeared.

間に位置する思想であり、同じく religion と呼ばれるキリスト教とは区別されるべきものであった。

#### 4 宣教師の中国宗教観

大会文集には中国から来た6名の宣教師の文章が収められている。掲載順に並べると、Issac T. Headland (赫徳蘭)、W.A.P. Martin (丁韞良)、George T. Candlin (凱徳林)、Y.K. Yen (顔永京)、Ernest Faber (花之安)、Henry Blodgett である。前4名の文章は正式な大会議事日程に組み入れられているが、後の二編は scientific section に編入され、大会の議事には入っていなかったようである。またこの6名の宣教師が大会に出席したかどうかは、現在のところ確認できていない。実際に、何人かの宣教師は博覧会を参観したものの、大会には出席しなかった。例えば、長老派教会の宣教師・狄考文 (Calvin W. Mateer) はその一人で、博覧会には1ヶ月近く逗留したという<sup>39</sup>。以下、religion という語の使い方から、6名の宣教師が中国の宗教をどのように表象したかについて見てみよう。

大会8日目に北京大学教授 Issac T. Headland が「北京の宗教」と題する報告を行った<sup>40</sup>。文中で religion という語を2度使って、中国のすべての宗教、とりわけ儒・仏・道・回四大宗教を指している。作者は冒頭で、外国人が中国は貧しいためにキリスト教を支持することができないと考えるのは、大きな誤解だという。実は、中国人が信仰する4種の宗教——儒教・仏教・道教・回教はもちろんのこと、どの都市や郷村でも一瞥すれば、「中国人がしたいと思うことは何であれ、彼らにはなしとげるだけの能力がある」ことが見てとれるはずだという。たしかに北京には到る所に貧民がいて、去年の冬、前門だけでも400人が凍死した。だが、それが事実のすべてではない。北京にある寺院の数は、シカゴの教会を上回る。巨大なラマ廟・孔子廟・道観があり、さらに21もの清真寺がある。ほかにも天壇・月壇・農壇などがある。彼はとくに碧雲寺と妙峰山を取り上げて、中国の寺院は豪華に建立されていて、僧侶は一群の乞食だという。また彼は宣教師・狄考文の推計を引用して、中国人は祖先の祭祀のために年間およそ1億2,000万米ドルを費やしており、甚だしい浪費だという。

著名な宣教師・丁韞良 (1827-1916) の文章は13日目の討論に登場した。「アメリカの中国に対する責任」という題名であった<sup>41</sup>。題名が示すように、京師同文館で教習を務めていた丁の文章は他の宣教師とは異なり、アメリカの中国人労働者排斥法 (Chinese Exclusion Act, 1882) によって生じた中米関係の亀裂に対して、「中国は我々の隣人」であり、米国は中国に対して責任を負っており、そこにまさしく米国の利益があると指摘した。

39 Daniel W. Fisher. *Calvin Wilson Mateer: Forty-Five Years a Missionary in Shantung, China*. Philadelphia: The Westminster Press, 1911. (『狄考文傳：一位在中國山東生活了四十五年的傳教士』桂林：廣西師範大學出版社、2009年、153頁)

40 Issac T. Headland. "Religion in Peking." Barrows. op. cit. pp. 1019-23.

41 W.A.P. Martin. "America's Duty to China." Barrows. op. cit. pp. 1137-44.

米国議会の両党に「賢明な外交政策を採用し、人を不快にさせる条文に取って代える」必要があり、「そうすれば、我が国民は友人として歓迎され、米国は東洋の偉大な帝国に対する影響力を回復することができるだろう」と呼びかけた。<sup>42</sup>長老派教会の宣教師として、丁韞良は religion という語をあらゆる宗教を指す語として用いた。キリスト教を指すときには、Christian religion と表現して、キリスト信仰はすべての宗教を超越するものだと考えた。儒教に関して、彼は同文館のある中国人教授を例に挙げ、この人は算学の教授で西学に通じ、儒者として神と天の超越的な力を信じているが、宗教上の精神的要求は高くない、と言う。道教については、彼は老子と道教を区別して、「老子は美しいことばで崇高な真理を述べた」と言う。しかし、「悲しいかな、彼の門徒は墮落してしまった。彼らは錬金術を追い求め、どうしたわけか彼らの宗教は占術と魔除けへと萎縮してしまった」と言う。仏教に関しては、「仏教は比較的よい方だが、僧侶は無知と腐敗に瀕しており、中国の仏教が復興する可能性を見いだすことはできない」とする。日本仏教のことを知っていた彼は、「日本の仏教は今まさに巨大な覚醒を遂げつつある」と強調している。丁韞良は結論として、中国の「国家宗教はある種の混淆的な崇拜 (a heterogeneous cult) であり、儀式に関しては三種の宗教から借用している」とした。作者は 1850 年に中国へ渡り、この文章を発表したときには中国生活が 40 年を超えていた。上述の中国の三教に関する見方は、名著 *Hanlin Papers, or, Essays on the Intellectual Life of the Chinese* での彼のより詳しい記述から採られている。<sup>43</sup>

会議 15 日目に、北京から来た英国メソジスト教会の宣教師 George T. Candlin (1853-1924) が発言を行った。<sup>44</sup>この儒者の服装を身にまとった宣教師は、中国から駆けつけたにもかかわらず、中国に関する発言は少なく、各キリスト教団体が団結して布教活動を展開することを呼びかける内容であった。Candlin は儒教に対して一定の好感をいただいていた。彼の考えでは、儒教は中華帝国に「平天下」という外在的な統合力を与えただけであったのに対して、キリスト教が中国にもたらしたのは外在的な平和ではなく、キリスト教を信仰するキリスト教世界 (Christendom) なのであった。

大会 17 日目は、上海から来た中国籍の顔牧師 (Y.K. Yen) が短い文章の中で中国の宗教に対する見方を述べた。彼は religion という語を計 9 回使い、中国の宗教には儒・仏・道があり、三者をまとめて国教と呼ぶと述べた。「神の加護の下、この種の宗教はわが国の文明の中できわめて重要な役割を持つに至った。宗教によってわが人民は神・罪悪・懲罰・寛恕・靈魂の存在といった観念を有し、そこから恩義という観念が派生した。ちょうどユダヤ法と同じように、この宗教は比較的低次元にあるものの、我々をキリスト教へと導く導師の役割を果たしてきた。わが国にとって、キリスト教は一般のいわゆる自然宗教

42 W.A.P. Martin. "America's Duty to China." p. 1144.

43 W.A.P. Martin. *Hanlin Papers, or, Essays on the Intellectual Life of the Chinese*. London: Trübner, Shanghai: Kelly & Walsh, 1880, pp. 126-62.

44 George T. Candlin. "The Bearing of Religious Unity on the Work of Christian Missions." Barrows. op. cit. pp. 1179-91.

と同じであり、キリスト教の到来は国教を消滅させるのではなく、国教を完成させることになるのである。中国の国教はすでにその歴史的使命を果たしており、キリスト教の中国に対する意義は次の2点にある。第一は、精神的利益と道徳的利益である。精神上、キリスト教は神に関する新しい理念を中国人にもたらし、中国人の道徳観を向上させ、信義の欠如や女性蔑視等の考え方を変えることができる。第二に、思想上の利益と物質的利益である。中国の教育はすべて古代に関する知識の学習であり、人生の福利に関する内容は欠如していた。キリスト教会は西洋の「自由科学」(liberal sciences)を紹介し、中国語の書籍を大量に出版し、医療を普及させて中国で105箇所もの病院を開いた(1890年)<sup>45</sup>。

上海から来たドイツ籍の宣教師・花之安(Ernest Faber, 1839-99)は、「儒教の起源と発展」という短文を大会に寄せた<sup>46</sup>。原文の題名は“Confucianism”であったが、大会文集に収めるにあたり編者によってかなりの部分が削除された。花之安の没後、P. Kranzが原文を発見し、作者の著作が再版される際に収録した<sup>47</sup>。Kranzによると、花之安は会議開催に先立ち、この文章を別の場所で口頭発表したことがあるという。

花之安は1865年に来華、79年から83年にかけて『万国公報』に中国語で「自西徂東」を連載し、宣教師の間で中国と西洋の両方に精通しているとの名声を博した<sup>48</sup>。その連載は84年、香港で同名の書籍として刊行された。同書は中国と西洋の文明の優劣を比較したうえで、キリスト教の視点から改良の方法を指摘し、根源は儒教・道教・仏教にあるとして、次のように述べる。「この三教は崇拜の根本を明らかにせず、真理が明らかでないために、人心はかくも蒙昧である。各教の經典中に書かれたすぐれた箇所は、みな『聖書』にもあるが、イエスの言ったすばらしい道理は、他教の經典には見られない。なぜかという、『聖書』は神の黙示であって、各教が人心に由来するのとまったく異なるからである<sup>49</sup>。この中国語で書かれた本の中で花之安は「宗教」という語を使っていない。だが、religionと無関係なわけではない。

「儒教の起源と発展」において、花之安は儒教のreligion的な要素を論じている。彼は儒教の要素は孔子が生まれる何世紀も前にさかのぼることができ、pre-Confucianismにおいて「人は天という最高の権力、すなわち最高統治者である神に服従するものと見なされており、周代においては祖先崇拜が最も重要な宗教儀式であった」という。最後に彼は、孔孟の理想は中国では実現せず、寺院に祭られる鬼神(gods)は孔孟が提唱したものではない、という。それゆえ、彼は自信たっぷりに、鉄道・汽船・電灯によって、「千年紀(キリスト生誕)の前に古代精神が中国に現れたのと同じように、古代精神が西洋世界に出

45 Y.K. Yen. "What Has Christianity Done for the Chinese?" Barrows. op. cit. pp. 1311-12.

46 Ernest Faber. "Genesis and Development of Confucianism." Barrows. op. cit. pp. 1350-53.

47 Ernest Faber. *A Systematical Digest of the Doctrines of Confucius*. Translated from the German by P.G. von Möllendorff, Second Edition, The General Evangelical Protestant Missionary Society of Germany, 1902, pp. 100-115.

48 Timothy Richard. *Forty-Five Years in China*. pp. 219-20. William E. Soothill. *Timothy Richard of China*. p. 174.

49 花之安『自西徂東』(近代文献叢刊)上海:世紀出版集団、上海書店出版社、2002年、225頁。

現した」ことを儒教は思い知ることになるだろう、と言うのである。<sup>50</sup>

文集の最後に収められた中国に関する文章は、北京から来た米国公理会（American Board）の宣教師 Henry Blodgett（1825-1903）が執筆したものである。<sup>51</sup>この梗概は在華宣教師の間で議論紛々であった「聖号」（Elohim, Theos, God）の中国語訳に関するものであった。この問題に対する一般的な理解としては、19世紀初め以来、新教の宣教師は二派に分かれ、一つは主として英国の宣教師たちが中国の古籍に記されている「上帝」と訳すべきだと主張し、もう一つは主として米国の宣教師たちが「神」と訳すべきだと考えた。Blodgett は狄考文らとともに『聖書』の翻訳に携わったことがあり、この問題をめぐる論争のいきさつを理解していたのだが、一般的な理解とは異なる記述をしている。

現在、God に関する漢訳には三種類あり、それぞれに多くの出版物がある。一つは「神」と訳すもので、神聖な精神を論じるときに、新教の宣教師の多くとローマ、ギリシャの宣教師はみな「神」を用いる。次の一つは「上帝」であるが、このことばは教義の純潔性にそぐわないために、長い論争を経て拒絶された後、ローマ教会が「上帝」を使い始め、ギリシャ教会はなお使用を拒んでいる。三つ目は「天主」であり、ラテンとギリシャ教会がこれを用いる。<sup>52</sup>

モリソン（Dr. Morrison）以来の歴史が証明するように、「神の訳語は不十分だ」と Blodgett は考える。「上帝」はもともと国家礼拝における主たる崇拜対象を指すもので、正確ではない。三つの訳語の中から、「天主」を選んだ理由を次のように述べる。

中国語において「天」という語ほど宗教的意味あいを含んだことばはない。キリスト教は「天」の後に「主」を付けて、それを個性化することによって、それが一般的な創造主ではなく、あらゆるものの造物主で崇拜されるべき対象であることを表した。したがって、中国語における「天主」は、自然崇拜に対立するもので、真の神という意味を有している。<sup>53</sup>

こうして「聖号」の翻訳に関して、Blodgett は多くのアメリカ人宣教師が「神」という訳語を採用する一方で、300年前に中国へ来たマテオ・リッチと同じ「天主」を使ったのである。しかし、長年の論争を経て、「神」と「上帝」という訳語は併用され、異なる版本の『聖書』ではどちらか二者択一の状況となっていたのであり、もはや Blodgett がこの論争に波風を立てることはなかったのである。

50 Ernest Faber. "Genesis and Development of Confucianism." p. 1353.

51 Henry Blodgett. "Why Protestant Missionaries in China Should Unite in Using Tien-Chu for God." Barrows. op. cit. pp. 1378-79.

52 Henry Blodgett. op. cit.

53 Ibid.

以上、6名の宣教師の文章を概観することにより、我々はどのような結論を導くことができるだろうか。まず、中国に宗教があるかどうか、中国人に宗教心があるかどうかについて、この6宣教師は中国に宗教あり、中国人に宗教心ありとした。しかし、儒教の倫理的な効用を除けば、キリスト教の立場にある彼らは、直接的にせよ間接的にせよ、中国の宗教——儒仏道に対して低い評価しか与えず、儒教と道教が古代の宗教精神から逸脱していることをわざわざ強調した者もいた。そのほかに、中国の宗教とキリスト教とに類似性があるかどうかは来華宣教師が共通して関心を持つ問題であり、布教事業を順調に展開できるかどうかに関わる問題であった。大会では、丁韞良と赫徳蘭らの儒教に対する好意的な評価がこうした傾向を反映していた。しかし、いかに儒教の概念を用いて『聖書』の問題を翻訳するかについては、宣教師の間にも意見の違があった。Blodgettの文章によると、たとえ宣教師がGodを「上帝」や「神」と訳すことで妥協したとしても、異なる宗教——一神教と多神教の信仰の間には埋めがたい溝が存在していたのである。

## 5 日本の視点

9月27日、17日間におよんだ万国宗教大会は閉幕した。

シカゴ宗教大会に対しては様々な異なる見方があるにせよ、この大会が人類の宗教交流史上において重要な意義を有するという点について異議はあるまい。ミュラーは『比較宗教学』の中でゲーテの次のことばを引いている。He who knows one, knows none. 一つしか知らない者は、何も知らないに等しい。

「中国の宗教」はシカゴ大会において、いかなる宗教的な意味を有していたのだろうか。日本の宗教代表者たちの言論は、比較の対象として有益である。シカゴ大会での日本宗教の存在については深く研究されている。しかし、代表が大会に提出した文章については具体的な研究が欠けている。バローズが編纂した大会文集には、日本からあわせて17編の文章が寄せられており、仏教・神道・キリスト教の立場からそれぞれ宗教に対する見方が示されている。筆者にとってまず注目すべきは、平井金三 (Kinza M. Hirai) の二つの発言である。<sup>54</sup> 流暢な英語を話す平井は、「キリスト教に対する日本の真の立場」という文章でキリスト教世界の偽善——強者が弱者を欺いたり、人種差別をしたり等——を激しく批判して、満場の喝采を博した。<sup>55</sup> この一点だけを見れば、彭光誉が教案問題に関して西洋諸国の横暴な行為を批判したのと共通するように見える。キリスト教に対して、彭が儒教の立場から論じたのに対して、平井は仏教の立場からその理不尽さを批判したのである。

大会16日目、平井は「混合宗教」という題目で再び壇上に立った。彼は「宗教は未知の存在に対する信仰であり (a priori belief in an unknown entity)、理性的な知識は前提に

54 平井金三については、「平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究」(平成16年度～18年度科学研究費共同研究報告書、代表者：吉永進一)を参照されたい。

55 Kinza Riuge M. Hirai. "The Real Position of Japan Toward Christianity." Barrows. op. cit. pp. 444-50.

よって結論を導き出す過程だ」と言う。「ある人は、真理は神が創造したものだというのが、こうした考えは自己矛盾である。なぜなら神が一切を創造する前、神の存在が事実であったなら、いったい誰がその事実を創造したのか。ある人は次のように反論するかもしれない。神は絶対で、無限で、全能であって、神は人の智慧を超越したやり方で一切を創造したのだと。だが、こうした特性は両立不可能であり、神の存在を証明するには不十分である。創造とは相対性 (relativity) を意味するのであって、もし神が造物主であるなら、神は絶対という属性を失う。第二の矛盾は、神ではなく、信仰者の側にある。人の思想が無限で万能でないかぎり、人は神の無限を証明することはできない。平井は最後に次のように言う。存在／真理が因果の連鎖でつながっていることさえ確認できれば、あらゆる宗教は一つの宗教に統合 (synthetize) される。それが日本で悟りや仏と呼ばれる境地である<sup>56</sup>。

次に、宗教に対する文化を越えた理解という問題があった。李提摩太の翻訳による「儒論」と「道論」は簡潔な英文に訳されているため、上で見たように、その内容は一般のアメリカ人読者には理解しようのないものであった。キリスト教本位の立場から見ると、宗教の基準に合わない倫理体系 (儒教) か、宗教より下位の神霊崇拜 (道教) であるかのよう感じられた。日本の神道と仏教の代表者の発言も、聴衆に同様の感じを与えがちであった。

日本から来た神道の代表者2名はそれぞれ神道について述べた。柴田禮一の発表は無味乾燥なもので、その服装ほどには人々の関心をひかなかった<sup>57</sup>。神道実行教を代表して、西川須賀雄が神道の重要性を述べた。彼が概括した神道の祭祀 (worship)、政治 (administration)、教育 (teaching) の三原則は、神道は宗教ではなく、現世的な政治倫理であることを証明するものだった<sup>58</sup>。

「廃仏毀釈」を経て復興した日本仏教界の代表がこの会議で行った発表は、ケテラーの高い評価を受けた。しかし、仏教固有の名詞が直訳されたために、仏教について述べた何名かの僧侶の発表は難解晦渋で、冷静に見れば、ケテラーの評価は誉めすぎであった<sup>59</sup>。それに対して、鈴木大拙が翻訳した釈宗演による禅宗の説明はわかりやすく、仏教の因果観を要領よく紹介したものであった。仏陀・イエス・儒教の一致点——博愛と同情心——で結集することによって、戦争を止めることができると考えた。大会16日目には、大会には間に合わなかった川合芳次郎 (Yoshigiro Kawai) の文章が読みあげられた。日本の仏教には16の教派と30の分派があるが、「日蓮宗の教法は、仏陀が直接教えた真実かつ最良の仏法原理に基づいて打ち立てられているので、日蓮宗が最も卓越している」と、川合

56 Kinza Riuge M. Hirai. "Synthetic Religion." Barrows. op. cit. pp. 1286-88.

57 Reuchi Shibata. "Shintoism." Barrows. op. cit. pp. 451-54.

58 Nishikawa Sugao. "The Three Principles of Shintoism." Barrows. op. cit. pp. 1370-73.

59 Banriu Yatsubuchi 八淵蟠龍. "Buddhism." Barrows. op. cit. pp. 716-23. Zitsuzen Ashitsu 蘆津実全. "Buddha." Barrows. op. cit. pp. 1038-40. Horin Toki 土宜法竜. "Buddhism in Japan." Barrows. op. cit. pp. 1290-93.

60 Shaku Soyen. "The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha." Barrows. op. cit. pp. 829-31. "Arbitration Instead of War." Barrows. op. cit. p. 1285.

は自信をもって強調した。<sup>61</sup>大会に先立ち、川合はバローズ宛に他の仏教教派を貶す内容の手紙を送ったが、日本語を解さないバローズはその手紙を他の仏教代表者に見せたため、日本仏教会の内部に不和が生じたという逸話も伝わっている。

第三に、キリスト教徒による日本宗教の理解という問題がある。中国内外の宣教師によって描き出された中国の宗教が衰退し墮落した様相を呈していたのに対して、日本のキリスト教徒は内部分裂した二派が独自の神学体系をもたないという困難に直面していただくだけでなく、外部からの厳しい挑戦にもさらされていた。同志社社長の小崎弘道は「日本におけるキリスト教の大勢——目下の状況と未来の展望」と題する発表において、日本の教会が1882-88年に大発展を遂げた後、停滞・衰退した原因について回顧して、次のように指摘した。日本人の国民感情には変化が生じており、キリスト教は仏教、神道および反動派の妨害に遭った。彼らは「日本人のための日本」(Japan for the Japanese)をスローガンとしたのである。<sup>62</sup>小崎は『宗教要論』という本を翻訳出版したが、これは「宗教」を書名に冠した最初の著作であった。<sup>63</sup>

英語に堪能な岸本能武太は「日本宗教の未来」という講演の冒頭で、「現在の日本は、宗教と非宗教が対決する戦場であり、キリスト教と他の宗教が対決する戦場である」と述べた。<sup>64</sup>宗教はキリスト教・仏教・神道等の信仰を指し、非宗教とは懐疑主義 (atheism)、厭世主義 (pessimism)、不可知論 (agnosticism) を指す。宗教は必ずや消極的で破壊的な非宗教的思潮に打ち勝つであろうし、キリスト教は「普遍宗教」として「遅かれ早かれ日本の未来の宗教となるにちがいない」。

横井時雄は予定通りに大会に参加できなかったか、あるいは大会の最後によく間に合ったようであり、彼の提出した文章は第16日目に読みあげられた。「キリスト教とは何か——極東における問題」という題名に暗示されるとおり、作者は西洋を基準としてキリスト教の東洋における意義を論じる。しかし、いかに東洋に適應するかという問題は最後まで論じられることはなく、一人のキリスト教徒としての信心——キリスト教はいかなる時代の必要性にも適應することができる——が述べられる。<sup>65</sup>

続いて、同志社の外国人宣教師ゴードン (M.L. Gordon) が「日本仏教の特徴は、それが最終的には宗教ではないことを表す」と題する文章で、8つの理由を挙げて仏教を批判した。(1) 仏教の靈魂説には人格についてのまっとうな認識がない、(2) 神・窮極・絶対に関する概念がない、(3) 罪についての説が浅くて不当である、(4) 不正確な救済論、(5) 悲観論、(6) 女性蔑視、(7) 同一性と同質性の欠如、(8) 人の心に排他的な敬愛の念を打ち立てることがで

61 Yoshigiro Kawai. "A Declaration of Faith and the Truth of Buddhism." Barrows. op. cit. pp. 1290-93.

62 Kozaki Hiromichi. "Christianity in Japan; Its Present Condition and Future Prospects." Barrows. op. cit. pp. 1012-14.

63 ジュリオス・エイチ・シーレー／小崎弘道譯纂『宗教要論』十字屋、1881年。

64 Nobuta Kishimoto. "Future of Religion in Japan." Barrows. op. cit. pp. 1279-83.

65 J.T. Yokoi. "Christianity — What is It? A Question in the Far East." Barrows. op. cit. pp. 1283-84.

きない。<sup>66</sup>

大会文集の「科学部門」(Scientific Section)にもキリスト教徒の文章が数編収められている。同志社の松山高吉による「神道の起源」という発言梗概は、神道の起源と発展を簡潔に紹介しつつ、「神道は我々の元来の宗教 (original religion) ではない。それより前に存在していた信仰が神道の起源である。神道は迷信の説教 (superstitious teachings) と誤った伝統の中から発展してきたものである」と指摘した。<sup>67</sup> 箇木五郎「神道宗教」も同じく梗概であるが、神道には信仰と儀式はあるけれども、経典がなく、抽象的な信仰の体系もない、と冒頭で指摘する。「神道は今まさに死に瀕している。自らが虚弱なためではなく、よりよい宗教——イエスの教えが現れたためである。キリスト教は今まさに日本にのほりつつある太陽だ」と言う。<sup>68</sup>

以上からわかるように、日本の宗教に対するキリスト教徒の見方と、中国の宗教に対する宣教師の見方とは若干の違いがある。日本の代表は、宗教信仰としての神道と仏教の不徹底さを批判し、この二つの宗教勢力が大きな影響力を持っていることを認めるが、それは将来日本でキリスト教が発展することに対して彼らが示した楽観的な気持ちと矛盾するのである。小崎は次のように指摘する。他の国と違って、日本のキリスト教徒は女性が4分の3を占め、若い人が多く、「士族あるいは武士階級が絶対的優勢を占める」。この後者の点は、たしかに日本の他国と異なる点だといえよう。最後に、religionの使用に関しては、ゴードンの文章にだけ「神」(gods)、「鬼」(demons)、「土着宗教」(indigenous religion)、「支配的な迷信」(prevailing superstition)といった細分が見られ、religionは明らかに仏教、神道等を指している。そのとき、日本はすでにreligionから「宗教」への翻訳の転化を遂げていたのである。

## 6 religion から宗教へ

周知のように、religionの翻訳について、19世紀の来華宣教師は「教」と訳していた。最も早いモリソンの『英華辞典』はreligionを「教門」「教」と訳し、儒仏道「三教」をthe three religions in China、「教主」をfounder or head of a religionと訳し、キリスト教は「天主教」「西洋教」と訳された。<sup>69</sup>その後、W.H. Medhurst、<sup>70</sup> Wilhelm Lobscheid<sup>71</sup>らも同じ訳語を踏襲した。ところが、まさに彭光誉が指摘するように、religionと「教」とは似て非なるものである。中国語の「教」は教育・教化、religionは信仰の意味であり、

66 M.L. Gordon. "Some Characteristics of Buddhism as It Exists in Japan Which Indicate That It Is Not a Final Religion." Barrows. op. cit. pp. 1293-96.

67 Takayoshi Matsugama. "Origin of Shintoism." Barrows. op. cit. pp. 1370-73.

68 Goro Kaburagi. "The Shinto Religion." Barrows. op. cit. pp. 1373-74.

69 Robert Morrison. *A Dictionary of the Chinese Language*. Honorable East India Company's Press, 1815-23.

70 W.H. Medhurst. *A English and Chinese Dictionary*. Shanghai: Mission Press, 1842-43.

71 Wilhelm Lobscheid. *English and Chinese Dictionary*. Hong Kong: Daily Press Office. 1866-69.

両者は互用できない。こうした見方は中国の知識人の中では孤立したものではなかった。1899年、著名な翻訳家・嚴復は必克 (Alexander Michie) の『支那教案論』 (*Missionaries in China*) を訳したとき、「教と名づけたものは、天や神に仕えることや、生前死後の杳として知りがたきことの一切を必ず含むものであって、その文字の本義にいう文行忠信を伝授することではない。したがって、中国の儒術は、道・仏・回・景と併称して教と呼ぶべきでないことは明らかである。なぜなら、世の中で教と呼ばれるものは、みな自らの教えしか語らず、それは私のいう教ではないからだ。それでは中国にはもともと教がなかったのか。あった。孝こそが中国の真教なのである」<sup>72</sup>。一方、宣教師たちの考えははっきりしていた。これより10年ほど前の1887年、Rev. John Rossは「儒教に対する我々の態度」の中で次のようにいっている。「儒教はふつう一種の宗教と見なされている。しかし、儒教自らが我々のいう意味での宗教という語を受け入れ、その語によって儒教の体系を定義したいと思うだろうか。儒教・仏教・道教は中国の三教と称されている。だが、ここでの教は宗教ではなく、教導、教育体系の意味である」。「したがって、我々は宗教によってではなく、世界の道德体系によって儒教を定義することを希望する」<sup>73</sup>。

興味深いことに、「教」では religion の翻訳にならないことに気づいた後で、彭光誉は religion を「爾釐利景」と音訳した。語の構成という点から見ると、その意味は「整え定めて景を利する」と読める。ここでの「景」は「景教」を指す。彭光誉の religion に対する理解は儒教的で、宗教をキリスト教のみに限定したのである。そう考えたのは彭光誉だけではなかった。20世紀初め、嚴復がアダム・スミスの『国富論』を翻訳したとき、次のように言っている。「今西洋のいわゆる教とは「魯黎礼整」という。その本来の意味を考えるなら、釈迦の帰依するという意味である。したがって、世の中で教と称するものには、必ず鬼神がおり、祈祷の文があり、守るべき決まり事があって、それをまとめて宗門の信者とするのである」<sup>74</sup>。「魯黎礼整」は「野蛮未開に対して礼儀と規律を施す」という意味であり、「礼」「整」には儒家の教化という意味がある。さらに意味深長なことには、彭光誉や嚴復と立場を異にし、儒教は宗教であると強調した康有為が「釐利尽」という音訳を使用した。その意味は「利を尽く去る」となる。彼は「釐利尽」とは、一義を樹立することができる者は、信者を導くことができるという意味だ」という。この語にもやはり儒家思想の色彩が含まれている。

このように、「教」は儒家の教育、教化という意味であるから、religion とはどうしても通用しない。この点に気づいて音訳を選択したとき、彭光誉の「爾釐利景」と嚴復の

72 『支那教案論』(1899年)(A. Michie. *Missionaries in China*. 1892)、王栻編『嚴復集』第4冊、中華書局、1984年、850頁。

73 Rev. John Ross. "Our Attitude Towards Confucianism." *The Chinese Recorder and Missionary Journal* 18: 1 (January 1887), p. 4.

74 『原富』(Adam Smith. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*)、上海南洋公学。『嚴復集』第4冊、910頁。

75 『康有為全集』第4集、36頁。黄興涛「新名詞的政治文化史——康有為与日本新名詞關係之研究」黄興涛主編『新史学——文化史研究的再出發』第3卷、中華書局、2009年、119頁。

「魯黎礼整」は、いずれも儒家思想に照らして religion を理解したものであった。したがって、キリスト教に倣って「孔子教」を創出しようと考えていた康有為が、religion の音訳に「釐利尽」を選んだことも、その意味で不思議ではない。しかし実際には、「教」と religion を通用させることに賛成であろうとなかろうと、結果的に人々は religion の訳語として「教」を使った。李提摩太の翻訳において、儒教・道教・仏教がやむをえず宗教と翻訳されたばかりか、儒家の「礼」や「礼楽」までもが religion と翻訳された例を見ることができるのである。

religion を「教」と訳すのは儒教から見て不正確であるが、religion が「教」から「宗教」へと変わることは仏教語彙と関わる問題である。一般的に、新名詞としての「宗教」(shūkyō) は 1868 年の明治維新以後まもなく生まれ、1880 年代初めにはかなり広範囲に認知されるようになったと考えられている。<sup>76</sup>ヘボン『和英語林集成』の複数の版本を比較してみると、第 1 版 (1867 年) と第 2 版 (1872 年) では「教」「法」「道」が使われ、第 3 版 (1886 年) で初めて「宗教」(shūkyō) という語が加えられていることがわかる。<sup>77</sup>「宗教」という語は中国の仏教典籍に由来し、宗旨と教派という意味である。だが、religion の訳語としての「宗教」は、中国語からの単なる借用ではなく、明治時代に新たに造られた名詞といってよい。近代日本における宗教学の創始者で東京帝国大学教授の井上哲次郎は、この点をはっきりと強調している。まさしく明治初期の日本では、仏教の概念を通して religion を理解しただけでなく、religion の訳語としての「宗教」は一宗派の学説という意味にすぎず、それはもっぱらキリスト教を指すものであった。

そして日本語の「宗教」が海を渡って中国へ還ってきたとき、これとはまったく異なる反応が引き起こされた。黄遵憲は『日本国志』の中で「宗教」を用い、<sup>78</sup>康有為も『日本書目志』において「宗教」という語を襲用した。しかし、「宗教」という語の起源と構成を考証するうちに、嚴復と同じように「教宗」によって religion を翻訳しようという意見が生まれた。康有為は「宗教」という語の使用を、当初は受け入れたものの、やがて反対するようになった。

シカゴ大会での宣教師の文章を詳しく検討して、中国語のどのような概念が religion と訳されているかを調べることは重要な研究課題である。宣教師は religion という語でキリスト教を指しただけでなく、儒教・仏教・道教等をもその語で呼ぶことにより、religion に多様な含意を注入した。God の訳語をめぐる、宣教師たちは最後には「上帝」と「神」の 2 語を併用することで妥協に達したが、Blodgett が大会で再び「天主」を持ち出したように、すべての信徒を満足させることのできる完全な訳語など存在しないことが露呈した。語彙としての宗教はその含意が明確であるが、概念になると、宗教の意味は曖昧なものになってしまうのである。

76 井上哲次郎『哲学字彙』(附清国音符)、東京大学文学部印行、明治 14 年、77 頁。

77 *A Japanese and English Dictionary, with an English and Japanese Index by James Curtis Hepburn.* Rutland, Vt.: C.E. Tuttle, 1867, 1872, 1886. (J.C. ヘボン『和英語林集成』講談社学術文庫、1980 年)

78 黄遵憲『日本国志』(1887 年) 卷 32、學術志一。

中国の知識人は religion を「教」や「宗教」と訳すことに抵抗したけれども、ついには「教」は religion の訳語となったばかりか、「宗教」は religion の正式な翻訳語として 20 世紀初めには中国人の常用語となったのである。1908 年、初めて大辞典に採用された「宗教」(zōngjiào) という語の解釈は、「神を崇拜し、信奉し、希求するある種の思考、感情、行為のあり方」というものであった。<sup>79</sup> この辞典の編纂者はのちに中華民国の名高い国務総理となった顔惠慶であり、その父は 15 年前にシカゴ万国宗教大会で演説した顔永京牧師であった。

---

79 1908 年、顔惠慶『英華大辞典』（商務印書館）の religion に対する解釈は以下のとおり。A mode of thinking, feeling, and acting, which respects, trusts in, and strives after, the Divine, or God. 宗教；any system of faith and worship, 教、信奉、道門、派教；-ary, 宗教的、信仰的、教會的、教門的。